

平成 30 年 7 月豪雨災害に対する京都大学防災研究所の活動

牧 紀男¹

¹ 京都大学防災研究所（〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄）

E-mail:maki.norio.8v@kyoto-u.ac.jp

2018 年 6 月末から 7 月始めに発生したを西日本を中心とする豪雨災害について京都大学防災研究所が実施した調査・研究活動の概要と、今後の研究課題についての概要をとりまとめる。

Key Words: Evacuation, Disaster Management, Future Research Topics

1. 被害の概要

前線と台風 7 号の影響により 2018 年 6 月 28 日～7 月 8 日にかけて西日本において豪雨による災害が発生した。この豪雨は気象庁により「平成 30 年 7 月豪雨」と名付けられた。この災害による全国での死者・行方不明者は 237 名¹⁾にのぼるが、特に岡山県（66 名）、広島県（115 名）、愛媛県（31 名）における被害が大きくなっている。近年に発生した水害の中では最大規模の災害となっている。（2014 年 8 月 19 日豪雨災害（広島での土砂災害）死者 77 名²⁾（関連死含む）、2013 年台風 26 号（伊豆大島での土砂災害）死者・行方不明者 43 名（全国）（伊豆大島 39 人）³⁾、2017 年 7 月九州北部豪雨災害死者・行方不明者 44 名⁴⁾）。

京都大学防災研究所では「平成 30 年 7 月豪雨災」について防災研究所の総力をあげて調査・研究を行うこととした。研究の目的は、今後 30—50 年先の防災・減災を見据え、今回の水害の課題、今後必要な研究について防災研究所の総力をあげて検討を行うことである。

2. 研究の取り組み

(1) 研究チーム

平成 30 年 7 月豪雨災害について 1) 気象・水文、2) 地表変動、3) 治水、4) 情報・避難・災害対応（矢守）といった総合的な観点からの調査・研究を行うための研究組織の構成を行った。研究チームの構成は表 1 の通りである。

表 1 研究チームの構成

	研究リーダー
1) 気象・水文	石川裕彦（気象・水象災害研究部門），
2) 地表変動	千木良雅弘（地盤災害研究部門）
3) 治水、	角哲也（水資源環境研究センター）
4) 情報・避難・災害対応	矢守克也（巨大災害研究センター）
研究調整	牧紀男（副所長、社会防災研究部門）＜総括＞、 竹林洋史、川池健司（流域災害研究センター）＜幹事＞

(2) 中間報告会

2018 年 12 月 20 日に京都大学きはだホールにおいて中間報告会を開催した。出席者は防災研究所の研究者、外部からの参加者を含め 65 人であった。

中間報告会のプログラムは以下の通りである。

司会：竹林洋史

14 時—14 時 40 分 情報・避難・災害対応 矢守克也・
竹之内健介

14 時 40 分—15 時 10 分 気象・水文 竹見哲也

15 時 10 分—15 時 50 分 地表変動 千木良雅弘

15 時 50 分—16 時 30 分 治水 角哲也

16 時 30—17 時 全体議論 司会：川池健司

(3) 防災研究所研究発表会での報告

最終報告会は防災研究所研究発表講演会（2019年2月19-20日）において、西日本豪雨・台風21号についての報告が2月19日14:15~17:00きはだホールで開催された。

最終報告会のプログラムは以下の通りである（○は発表者）

14:15 局地スケールでの豪雨・暴風の数値解析：平成30年7月豪雨と台風21号 ○竹見哲也・吉田敏哉・山崎聖太・長谷健太郎

14:30 平成30年7月豪雨に対する台風第7号の予想進路の影響 ○榎本剛

14:45 2018年7月豪雨の異常さと地球温暖化による影響評価 ○小坂田ゆかり・中北英一

15:00 2018年7月豪雨の総観場予測可能性 ○吉田聡

15:15 西日本全体を対象にした平成30年7月豪雨の降雨流出解析 ○佐山敬洋・近者敦彦・寶馨・角哲也

15:45 2018年7月に広島市安芸区矢野東で発生した土砂災害の特徴 ○竹林洋史・藤田正治

16:00 西日本豪雨における宍粟市の流木被害 ○岡本隆明・山上路生・角哲也・佐山敬洋

16:15 Influence of Gates Closure on the Flood Inundation Scale of July 2018 in Oe Town. ○Herman MUSUMARI・Hajime NAKAGAWA・Kenji KAWAIKE・Rocky TALCHABHADEL

16:30 亀岡盆地の氾濫解析に基づく日吉ダムの治水操作手法の検討 ○竹門康弘・岩本麻紀・野原大督・角哲也

16:45 平成30年7月豪雨災害を踏まえた超過洪水時のダム治水操作手法の検討 ○野原大督・竹門康弘・角哲也

3. 今後の課題

「平成29年九州北部豪雨」では、これまで経験したことが無いような強度の降雨により被害が発生したが、「平成30年7月豪雨」は梅雨期にしばしば発生する降雨であったが広範囲での長く続く降雨により、多くの人的被害もふくむ被害が発生した。以下、報告会等で知り得た調査・研究の成果を踏まえ筆者が今後必要であると考えた研究課題をとりまとめることとする。

- ・高齢者の命を守る防災対策のあり方（垂直避難できない人の命をどう守るのか）
- ・繰り返される土砂災害による人的被害の軽減対策
- ・土砂災害警戒区域内でのセカンドチョイスの避難場所の確保可能性の検討
- ・ダムの防災効果と操作についての住民の正しい知識と認識の醸成
- ・過去の経験・公開ハザード情報を活用したコミュニティーでの避難対策のあり方

参考文献

- 1) 消防庁応急対策室、平成30年7月豪雨及び台風第12号による被害状況及び消防機関等の対応状況（第59報）、平成31年1月9日（水）16時00分
- 2) 消防庁応急対策室、8月19日からの大雨等による広島県における被害状況及び消防の活動等について（第47報）、平成28年6月24日15時30分
- 3) 消防庁応急対策室、平成25年台風第26号による被害状況等について（第37報）、平成26年1月15日10時00分
- 4) 消防庁応急対策室、平成29年6月30日からの梅雨前線に伴う大雨及び台風第3号の被害状況及び消防機関等の対応状況等について（第75報）、平成30年2月22日16時00分

Summary of the Research Activities by DPRI, Kyoto University

Norio MAKI

This is the summary of research activities by Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University responding to the 2018 western Japan heavy rain fall.